CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

国立国語研究所学術情報リポジトリ

地域社会における中央語と地方語 ： 長岡市における1000人調査の結果を見る

著者	徳川 宗賢
雑誌名	ことばの研究
巻	2
ページ	171-185
発行年	1965-03-31
シリーズ	国立国語研究所論集 ； 2
URL	http://doi.org/10.15084/00001741

地域社会における中央語と地方語

——長岡市における1000人調査の結果を見る——

徳　川　宗　賢

地域社会に，現在，中央語はどのように侵入しているのか。

地方語は，いっせいに退潮していくのであろうか。老人が地方語を多く使うというのは本当であろうか。若い世代の人たちは，やはり中央語をよく使っているのであろうか。男性と女性とでは，どちらが地方語をよく保存しているのか。学歴との関係はどうであろう。地域社会内に特殊の小集団があって，中央語と地方語との使用状況に，なにか差のあることはないか——。いろいろの疑問が湧いてくる。

これらの疑問を解くために，すでにいくつかの研究があった。ここに述べる長岡市<1000人調査>の結果も，以上の問題にいささか答えていると思う。

調査時——1962年9月[1)]

調査地——新潟県長岡市（旧市域すなわち市街地，および宮内地区・栖吉（すよし）地区）

被調査者——調査地に居住する，明治26年生まれ以下昭和22年生まれまで（当時69歳以下15歳まで）の，長岡市生まれ長岡市育ちの，男女989名（男性508名，女性481名）

旧市域は4中学校区に分かれているが，うちわけは，南中学校区243名，東中学校区182名，東北中学校区205名，北中学校区150名であった（以上880名）。宮内中学校区66名，栖吉中学校区43名。

生年の観点から等間隔5層に分けると，明治26～36年生70名，明治37～大正3年生145名，大正4～14年生211名，昭和1～11年生281名，昭和12～22年生282名であった。

学歴から分類すると，小学校中退6名，小・中学校卒516名，高校・旧中・旧高女卒406名，大学・短大・旧高専卒42名，不明29名となった。

---

1)　この<1000人調査>は，「国立国語研究所年報14」に報告されている「国民各層の言語生活の実態調査」のうち，基礎抽出調査（同書49頁をみよ）に付随して行なった。

調査法――被調査者チェック式選択肢つき調査票配布法。回収率約80%（回収数989枚）

調査票・調査項目――国立国語研究所地方言語研究室で作成中の「日本言語地図」のための調査項目の中から，長岡市で，しかも被調査者チェック式の調査に適当と考えられる10項目（女・茸・氷・凍る・凍傷・凧・梅雨・玉蜀黍・灰・眩しい）を選んだ。各項に選択肢（例：女についてオナゴとオンナ）を示した。なお，項目は，単語の観点から選んである。音韻・アクセント・文法などに関する項目はない。

まず，自身の，しかも親しい人々（家族や友人）に対して，くつろいで話す時使うことばを選択するように注意し，次に，現在使わないことばや二形（以上）併用の場合の取り扱い方を示し，さらに，記入具体例を掲げて，資料の整一化をはかった。

結果を示そう。

1　地方語ははたして使われているか――項目として選んだものが，地方語の出そうなもの，中央語と地方語のせりあいの見られそうなものばかりだっただけに，10項目とも地方語形の全く消滅してしまったものはなかった。各項目とも，たしかに中央語形も出てくるが，一方根強い＜地域社会のことば＞地方語形を，専用ないし併用の形で選択してもらうことができた。その結果，地域社会内部の言語の闘争を，一部分ながらうかがうことができる。

2　中央語と地方語との対立状況はどうか――

（**a**）　中央語形に対立する地方語形は，項目によって，1種だけのものもあったし，10種以上に及ぶものもあった。

1種だけのもの，3項目。氷（コーリ）についてザエ。灰（ハイ）についてアク。眩しい（マブシイ）についてカガッポイ[1]。

力の強い地方語形は1種だが，他に弱い地方語形をいくつか持つもの，4項目。茸（キノコ）について強(力強い地方語形）がコケ，弱(力の弱い地方語形）がコケラ(2%)。凍るについて強がシミル，弱がカンジル。梅雨（ツユ）について強がニューバイ，弱がサズイ(3%)とバイウ(2%)。女（オンナ）について強がオナゴ，弱がアネサ・アマ・オトメ・オンナゴショ・オンナッコ・オンナノコ・

1）ザエ対ザイ，カガッポイ対カガッボイ対カガポイなどの，音韻的変種の対立について集まった情報は，以下一貫して無視する。後考にまちたい。中央語形についてのハイ対ハエも同じ。

オンナノヒト・カノジョ・ジョシ・ジョセー・スケ・ナオスケ・ムスメ・バテ（ジョセー２％，他は１％未満）[1]。

２種のもの，２項目。凍傷（シモヤケ）についてユキガケとユキヤケ。凧（タコ）についてイカとイカダコ。

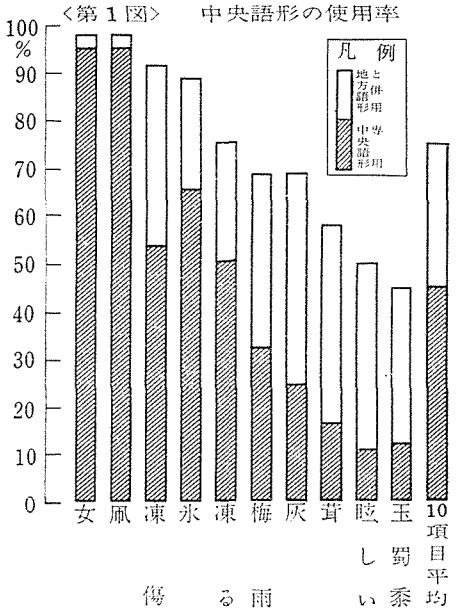
力強い地方語形は２種だが，他に弱い地方語形をいくつか持つもの，１項目。玉蜀黍（トーモロコシ）について強はトーキビとキビ。次いでトーマメがやや強いが（７％），他のカシキビ・コクデ・コクレ・コクレンカシ・サトーキビ・トー・トーギミ・トークッシ・トーモロシ・ポプコーン・マキビ・モチキビ・モロコシ（コクレンカシ２％，他は１％未満）は弱い[2]。

１地域社会といえども，なかなか複雑である。中央語形と地方語形とが，１対１で対立するものは，かならずしも多くないことがわかった。

（**b**）中央語形の力は，各項目同じでない。逆に言えば，地方語形の抵抗力は，項目ごとに違う。

女や凧を見ると，中央語形のみを答えたもの（地方語形を全く答えないもの）が95％以上に達し，地方語形のみを答えたものは，それぞれ１％以下であった。一方，玉蜀黍や眩しいを見ると，中央語形専用が11～12％，地方語形専用が50％以上となっている。

すなわち，中央語と地方語との勢力争いは，項目ごとに違う，ということができる（第１図参照）。しかし，残念ながら，10項目を比較する範囲内では，どういう範疇の項目で中央語形が優勢なのか，どういう内容の項目で地方語形が依然として強



〈第１図〉　中央語形の使用率

1)　オトメ・オンナノコなど，地方語形と言い難いものも含まれるが，使用者が少数であるし，いちおうここにまとめた。

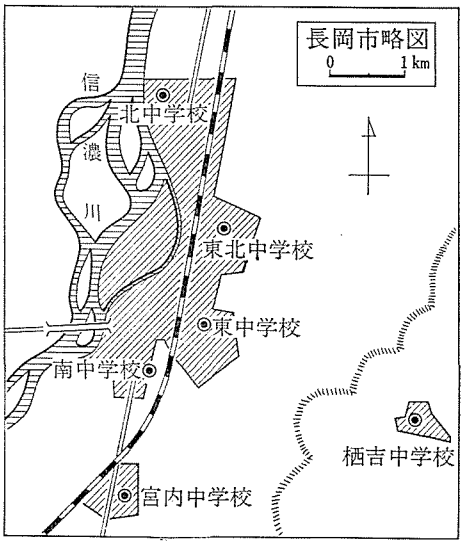
2)　サトーキビ・ポプコーンなどは，不適当な答えとも考えられるが，使用者が少数であるし，いちおうここにまとめた。

力なのか，判定できない。

中央語形使用率の10項目平均は，専用で45.3%，専用併用合計で74.4%であった。

3　地域社会内に特殊小言語集団はないか——989 名からの回答を，職業集団・階級集団などの観点から分類することは，いまできない[1]。

ただ，同じ長岡市ながら，宮内中学校区（以下宮内という）と栖吉中学校区（以下栖吉という）とは，旧市域4中学校区（以下4区という）からやや離れているので，これらをたがいに比較することができた。



＜第 2 図＞

市中心部（4区）に近いのは宮内である。やや離れているのは栖吉である（第2図参照）。

したがって，4区で中央語の勢力が最も強く，信越本線・国道沿線の宮内がそれに次ぎ，山添いの農村栖吉では，地方語の勢力がまだかなり強かろう——こう予想するのは，当然のことである。

はたして，茸・氷・灰・眩しいの4項目は，その通りの傾向を示した。眩しいを例にとれば，4区および宮内で中央語形専用の人が9～10%いるのに，栖吉では0%（皆無）という状況であった。

女では，各地域とも中央語形があまりにも強いので，3地区間の差が目立たない。凍ると梅雨は，4区と宮内がほぼ同じ。栖吉で地方語形が強い，という状況であった。女・凍る・梅雨は，最初の想定とやや違うと言えるかもしれない。しかし，以上7項目をまとめて，まず予想通りと言えよう。しかし，他の3項目（凧・凍傷・玉蜀黍）は，そうとばかり言えない傾向を示している。

凧はどうか。これは，女と同様，中央語形の極めて強い項目であった。が，ここでは，宮内・栖吉で地方語形絶無，すなわちこの2地域では，中央語形完全使

1）各被調査者の職業についての情報は集っているが，未整理である。階級については資料がない。

用という結果が出た。イカやイカダコといった地方語形は，かえって中心部である４区にしか見出されない。これは，最初の想定の逆の結果である。宮内・栖吉には，元来，中央語形（タコ）以外の語形はなかったものと考えなければなるまい。

凍傷(シモヤケ)には，ユキヤケ・ユキガケの二種の地方語形がある。中央語形のシモヤケが，中心を遠ざかるにつれて弱まること，これは最初の想定の通りで，納得できる。また，地方語形ユキガケが，中心を離れるに従って勢力を強めていることも予想通りである。しかし，ユキヤケは違う。ユキヤケは，専用併用合計で[1]，４区17%，宮内14%，栖吉７%と，中心から遠ざかるにつれて，その勢力を弱めている。地方語形だというのに，これはどうしたことであろうか。

私は，次のように考える。このユキヤケは，いまでこそシモヤケに対して地方語形の地位に立っているが，実は，前代の中央語形であった。過去のある時代(明治以前か)，市街地の勢力を背景に，周辺に侵入して行った。が，途中の段階で，まだ末端まで十分に根を拡げないうちに，シモヤケにその地位を奪われた。つまりユキヤケの現在の勢力配置は，過去の栄光の残照である――。

玉蜀黍（トーモロコシ）は，地方語形が多くて複雑である。しかし，中央語形トーモロコシが，中心を遠ざかるにつれて弱まること，地方語形トーキビが，逆に中心を離れるに従って勢力を強めることは，最初の想定通りで，納得できる。また，カシキビ・コクデ以下13種の地方語形は，あまりにも勢力が弱すぎて，問題にならない。

そこで，キビとトーマメとが，正面にあらわれてくる。

キビを専用併用の合計で見ると，４区22%，宮内19%，栖吉２%（専用では，４区８%，宮内11%，栖吉０%）である。凍傷のユキヤケの場合と同様，キビは地方語形にもかかわらず，中心を離れるに従って，その勢力が弱まる。すなわち，この場も，トーモロコシが導入される以前（明治以前か）の中央語形と考えていいであろう。

トーマメは，専用併用合計で，４区６%，宮内26%，栖吉０%（専用で４区0.4%，宮内３%，栖吉０%）であった。宮内で断然強く，４区にわずかにあり，栖吉は皆無という結果である。つまり，方言語形トーマメの力は，栖吉→４区→宮内の順序で強くなっていく。

---

1)　専用で見ると，４区２%，宮内０%，栖吉５%となるが，少数なので，専用併用合計で考えることにする。

宮内は，長岡市旧市域の南に連なっている。ここで，いままでひとつにまとめてあった中心部4中学校区を，トーマメについて別々に集計すると，どうなるか。専用併用合計で，南中学校区8.2%，東中学校区5.3%，東北中学校区5.4%，北中学校区 3.3%であった。

はたして，宮内に近い南中学校区で，力が強い。これによって，トーマメは，この地域社会内で，さらに小さい地域，すなわち長岡南部に中心勢力を持つ（そして栖吉には及ばない）地方語形であることがわかった。

以上地域別集計の比較から，市域の中心に近づくほど，中央語の力が強いという最初の想定は，一般的傾向として，まず裏書きすることができた。3地域の中央語形の勢力10項目の平均は，4区，専用で45.9%，専用併用合計で74.8%。宮内，専用で42.0%，専用併用合計で69.1%。栖吉，専用で32.9%，専用併用合計で58.7%であった。

また，凍傷と玉蜀黍について，地方語形の中に，実は古い時代の中央語形と考えられるもの――ユキヤケ・キビを見出すことができた。また，凧・玉蜀黍について，小勢力圏の地方語形――イカ・イカダコ（以上4区）・トーマメ（長岡南部）を発見することができた（第3図参照）。

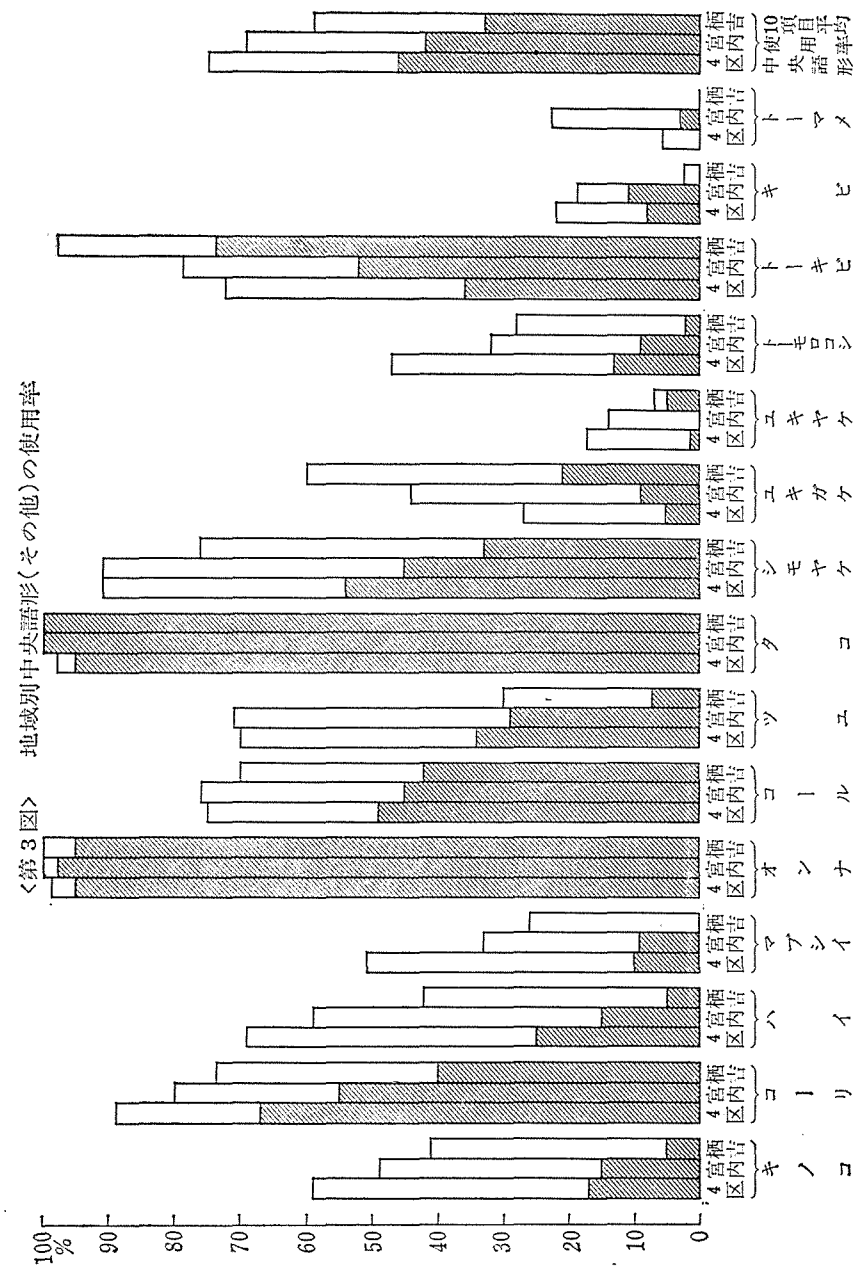
4　男性と女性とは，どちらが地方語形をよく保存しているか――氷（コーリ）を例にとってみる（ここでは，中央語形でなく，地方語形を目安にしてみた）。ザエの専用は，男性10%，女性11%で，女性の方が地方語形をやや多く答えている。しかし，コーリともザエとも言う答え，すなわち併用は，男性26%，女性18%で，男性の方が断然多かった。従って，専用併用の合計，つまりともかくザエに言及したものの総数も，男性36%，女性29%となって，男性の方が多いことになる。

このように，地方語形専用では女性の方が多いのに，地方語形中央語形の併用について調べると，男性が断然多いため，結局は，男性の方が地方語形を多く使うものには，ザエのほかに，凍るのシミル，灰のアクがあった。

地方語形専用で調べると男女間に差がないが，中央語形との併用で男性がぬきんでる（したがって専用併用合計でも男性が多い）ものもあった。凧のイカおよびイカダコである。

専用の場合も，併用の場合も（したがって当然専用併用合計でも），男性が多い。つまり男性の方が断然地方語形をよく使う項目もあった。茸のコケ，凍傷のユキガケ，玉蜀黍のトーキビがそれである。

<第3図>　地域別中央語形（その他）の使用率



一般に，男性の方が，地方語形をよく使うらしい。時と所とを心得て，中央語形と地方語形をよく使い分ける習慣を持つ（併用の多いことをさす）のも男性らしい。以上の結果からは，そう言えそうである。

梅雨のニューバイでは，併用で見ると男女間の区別がなかった。しかし，ここでも専用で男性の方が地方語形をよく使うため，結局専用併用合計で，男性の方が地方語形をよく使う。

男性女性間に，区別のないものもある。女のオナゴ，玉蜀黍のトーマメがそれであった。ただし，オナゴ（4％）やトーマメ（7％）は，使用率が極く低い。すなわち，これらも，例外とはならない。

専用の場でも併用の場合でも（したがって専用併用合計でも），逆に，女性の方が地方語形をよく使うものも，あることはあった。眩しいのカガッポイがそれである。しかし，同傾向のものは，他にない。男性の方が地方語形をよく使うことは，どうも一般的な傾向と言えそうである。

実は，ほかにも例外が二つあった。地方語形専用では男性の方が多い。しかし，地方語形と中央語形との併用では，それにもまして女性の方が多い。そのために，女性の方が，結局地方語形に多く言及しているというものである（ちょうど，最初に例示した氷のザエの場合の逆になる）。凍傷のユキヤケと，玉蜀黍のキビが，それであった。これはどうしたことであろうか。男性の方が地方語形をよく使うというのは，ウソであろうか。しかし，両者が，ともに3の考察で，古い時代の中央語形だろうと推定したものだったことに気づくと，そこから何らかの答えが出て来そうである。いま結論を急ぐことはさしひかえたいが，男性の方が地方語形をよく保存しているという事実は，動きそうもない（第4図参照[1]）。

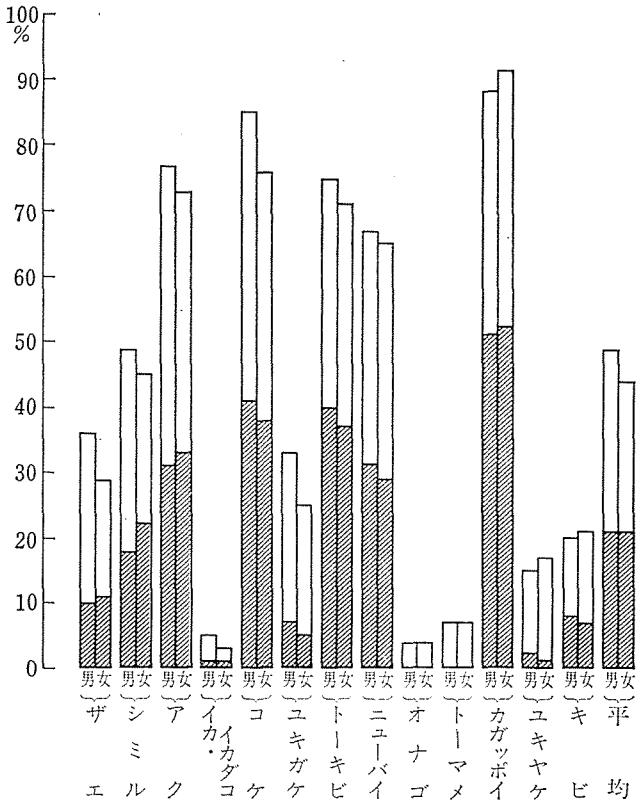
なお，ユキヤケ・キビを除く11について，地方語形使用率の平均を出すと，男性，専用20.9％，専用併用合計48.9％。女性，専用20.7％，専用併用合計44.5％となった。

5　老人が地方語を多く使うというのは，本当か――世代が交替するにつれて中央語の勢力が次第に強まるであろうことは，容易に想像される。調査結果には，各項目についてどんな傾向があらわれたか。

等間隔5層に分けた各年齢層の中央語形使用の状況は，第5図の通りであっ

1)　男性の方が地方語形をよく保存している事実には，疑問が出るかもしれない。経験的に，老年の女性こそ，地方語形の保存者であるということがよく言われる。しかし，ここでの結論が，実証的な，ただし被調査者チェック式選択肢つき調査票配布の調査法にもとずく調査結果から導き出されたものであることに，注意していただきたい。

た。老年層から若年層へ，世代が移るにつれて中央語の使用率が高まっていく（表によって，あと何年たつと地方語形がなくなるか，予想できるであろう）。最初の想定は，大体のところ裏書きされた。10項目の平均値は，明26～36年生，専用38.8%，専用併用合計62.4%。明37～大3年生，専用36.3%，専用併用合計63.1%。大正4～14年生，専用39.5%，専用併用合計69.5%。昭1～11年生専用44.1%，専用併用合計75.6%。昭12～22年生，専用55.4%，専用併用合計82.4%であった。しかし，図表を仔細に見ることによって，さらに，次のことを指摘できる。



〈第4図〉　男女別地方語形の使用率

（a）　オンナ・タコのように，各年齢層にわたって中央語の力が強いものは，世代が移っても，中央語形はそう増えない。言いかえれば，1960年代にあたり，地方語形は，最後のどたん場で，底力を発揮するものらしい。

（b）　中央語形専用で見ていくと，その勢力の伸びのゆるやかなものがある。（a）で述べたもののほか，ほとんどの場合，中央語形は急激に増えていく。しかし，ツユ・キノコ・マブシイ・トーモロコシなどを見ると，その専用者は，世代が更新しても，あまり増えない。急増するものと漸増するものと，項目としてい

かなる質的な差があるのか。これはいま，不明と言わざるをえない。

（c）　若年層ほど中央語形をよく使い，老年層ほどその逆であるかというと，いつもそうとばかりは言えない。最高年層は，案外中央語をよく使う。10項目平均を見てもそのようである。また，各項目別に見ると，専用でいえばコール・ハイ・マブシイ・キノコ・トーモロコシ，専用併用合計でいえばコール・ツユ・ハイ・トーモロコシがそうである。最高年層は，自身が地方語形を使っている（使っていた）ことを反省する能力が衰えつつあるのではないか，とも推定される。しかし，そうでない（最高年層の中央語形を使うことが最も少い）ものもあるから，速断することはできない。どういう種類の項目に，そうした傾向が現われるのか，いま不明と言わざるをえない。

（d）　第5図には，3の考察で，古い時代の中央語形と推定した，玉蜀黍のキビと凍傷のユキヤケとを，参考として併せて示しておいた。さすがに，現在地方語形の地位にあるだけあって，ともに世代の更新につれて減少する傾向が見られる。しかし，専用併用合計の方でみると，単純には割り切れないようである。特にキビは，簡単に消滅しそうにない。

6　年齢層別にみた変化を，さらに男性女性別に見るとどうなるか――結果は，第6図の通りである。大づかみに言えば，男性女性とも，第5図と同様の傾向を示している。しかし仔細に見ることによって，さらに次の諸点を指摘することができる。

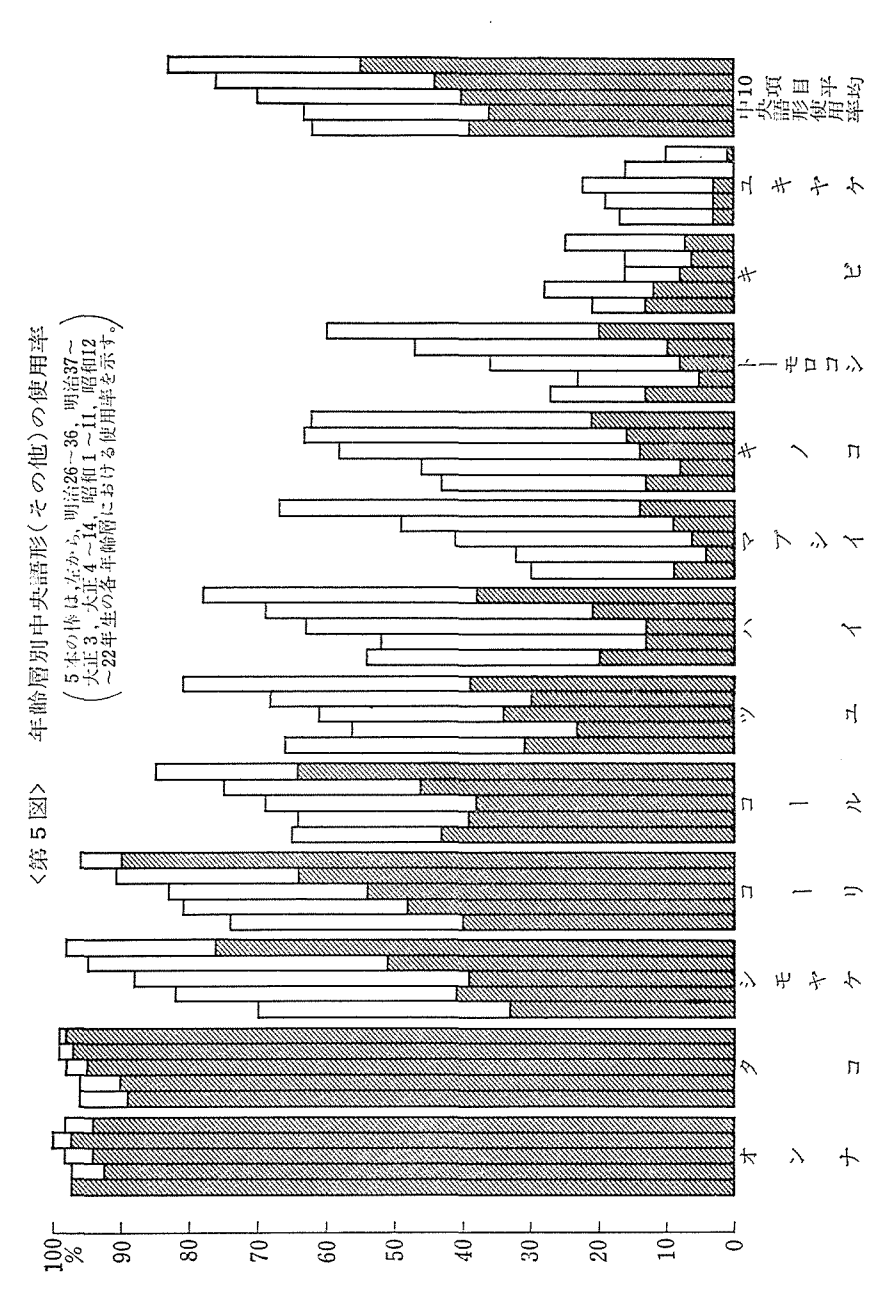
（a）　男性の方が，一般に順調な変化をたどるのに対して，女性の場合は，カーブがかならずしもなだらかでない。ツユの，専用併用合計で両者を比較すると，その典形が見られる。

大差ない，と言えばそれまでだが，女性の方が，男性と比較して，回答記入の場合，不安定な精神状態にあって，それが調査結果に反映しているのかもしれない（女性の心理は複雑である！）。

（b）　最若年層について男性女性を比較すると，女性の方が，中央語形を一般によく使う。10項目平均，女性は，専用55.7%，専用併用合計83.1%が中央語形を使っている。男性は，専用54.7%，専用併用合計81.6%である。

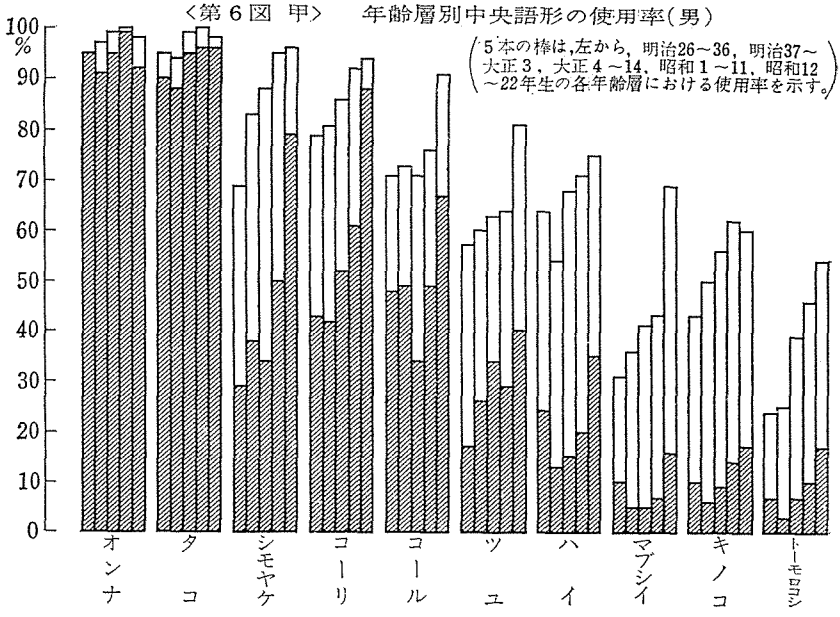
もう一段階上の，昭1～11年生でも同様で，10項目平均，女性，専用45.1%，専用併用合計76.6%。男性，専用43.5%，専用併用合計74.9%であった。

一般に，若い女性が中央語形をもっともよく使う（地方語形を一番使わない）というのは，ここでも裏付けられた。



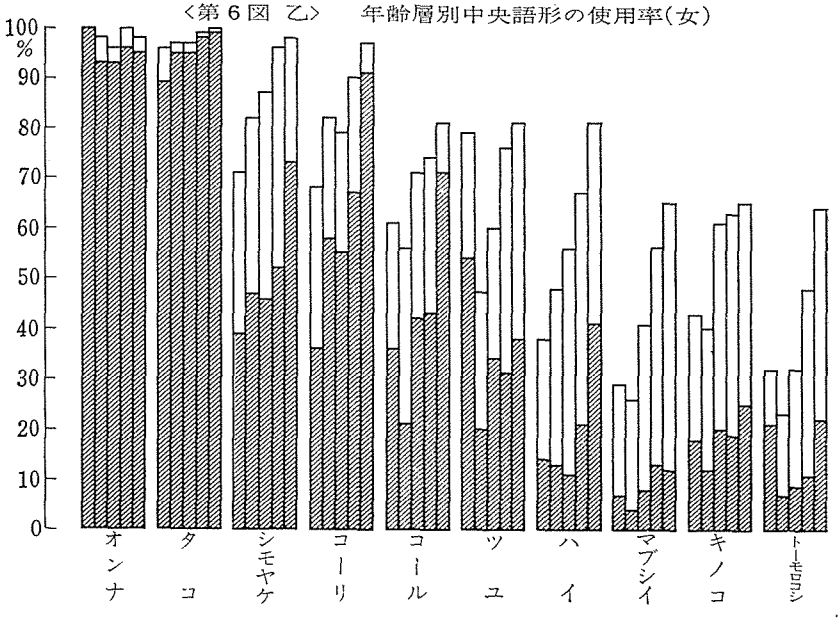
〈第5図〉　年齢層別中央語形（その他）の使用率

（5本の棒は，左から，明治26～36，明治37～大正3，大正4～14，昭和1～11，昭和12～22年生の各年齢層における使用率を示す。）



〈第６図　甲〉　年齢層別中央語形の使用率（男）

（５本の棒は，左から，明治26～36，明治37～大正３，大正４～14，昭和１～11，昭和12～22年生の各年齢層における使用率を示す。）



〈第６図　乙〉　年齢層別中央語形の使用率（女）

（c）　中央語形専用について，もっとも低い率を示したのは，明37～大３年生の男性であった。10項目平均36.5%である。

全体（100%)から，中央語形専用を除けば，残りは，地方語形専用併用の合計である。すなわち，この年齢層の男性こそが，最も高率に，地方語形を答えてくれたことになる（方言調査にもっとも適当な層か)。

ちなみに，この年齢層の女性は，中央語形専用率，10項目平均 37.0 %であった。最高年齢層では，同男性37.3%，女性41.4%である。最高年齢層の女性は，意外に，地方語形を答えていない。

第７図として，10項目平均，男女別，年齢層別，の中央語形の使用率を示しておいた。

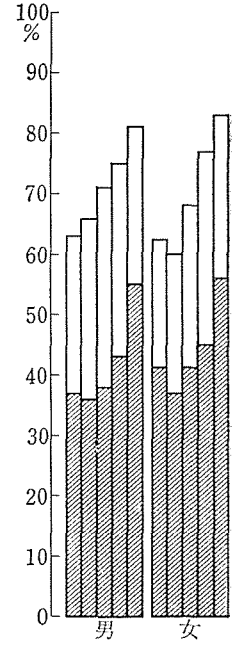
7　学歴によって，中央語形の使用率はどう変わるか――最初に述べたように，この調査では，全体を，学歴の観点から，小中学校卒，高校・旧中・旧高女卒，大学・短大・旧高専卒）の３層に分けている[1]。

学歴が高くなるにつれて，中央語形の使用率も高くなるであろう。これは当然の予想である。はたして調査の結果も，いちおうその通りであった（第８図参照)。中央語形専用併用の合計でみると，オンナの場合だけ，そうとも言えない結果が出ているが（使用率があまりに高いことと関係があろう)，他はすべて，学歴の高いものほど中央語形をよく使っている。

しかし，中央語形専用の率でみると，ことは簡単ではなさそうである。たしかに，ツユの場合のように，学歴の高いものほど中央語形専用の率の高まるものもあるが（他にハイ・キノコがある)，むしろトーモロコシ（小中卒11%，高卒15%，大卒２%）のように，大学卒が，他にくらべて最も低率となるものが目立っている。シモヤケ・コール・マブシイもそうである。

タコ・コーリも，大学卒が最も低率ではないが，決して最高率ではない。

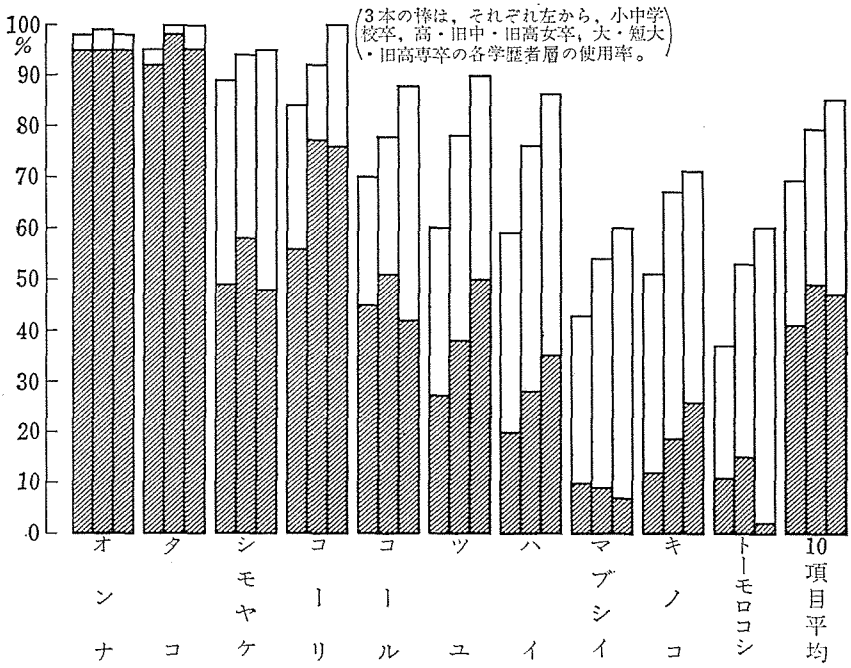
10項目の使用率を平均にみると，中央語形専用の率は，小中卒 41.7 %，高卒48.8%，大卒47.7%となる。



<〈第７図〉
年齢層別中央語形の
使用率（10項目平均）

1)　以下，989 名から，小学校中退６名，学歴不明19名，計25名を除いて考える。

<第８図>　学歴別中央語形の使用率



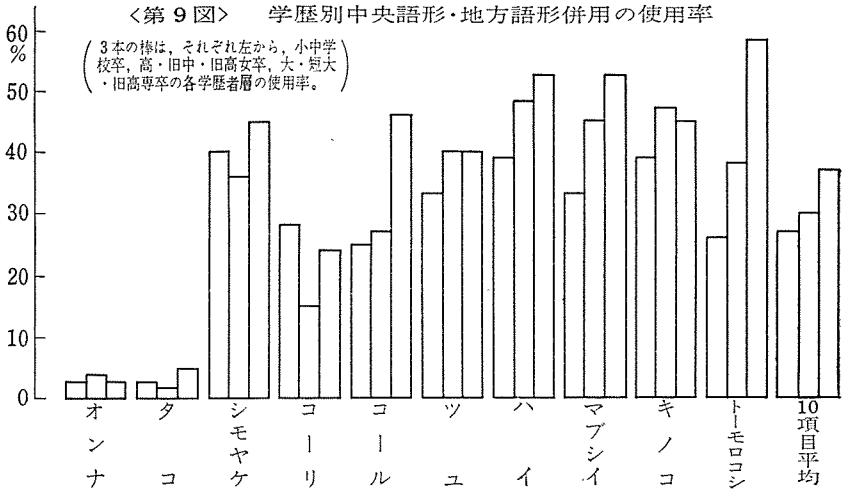
低学歴者がもっとも低いが，ここでも，大学卒業者は最高率でなく，ちょっとと奇異に感じられる（専用併用合計の10項目平均は，小中卒68.6%，高卒79.0%，大卒84.8%）。

中央語形専用率は，ちょうど地方語形専用併用の合計の率の裏になっている，と６の(ｃ)で述べたことを，思い出していただきたい。中央語形専用率の低いことは，すなわち，地方語形専用併用の合計の率の高いことを意味する。

高学歴者は，自己の無意識の行動（地方語形を普断使っていることをさす）を反省して回答する能力が，一般にすぐれているのではあるまいか。この層が地方語形を多く答えるのは，恐らくそのためと考えられる（低学歴層が地方語形を多く答えるのは，これは言うまでもなく，彼らが地方語社会の担い手だからであろう）。

中央語形併用（すなわち地方語形併用）のみをとりだして，学歴別にみて10項目平均すると，小中卒26.9%，高卒30.2%，大卒37.4%となる。これも，高学歴層が，時と所とを心得て，両語形をよく使い分ける習慣を持つということのほか

に，行動を反省して回答する能力がすぐれていることを意味するのであろう（第9図参照）。



最後に，反省を記して，稿を閉じる。

1　このレポートでは，被調査者を，長岡市生まれ長岡市育ちの人に限った。実は，これ以外の居住経歴を持つ652名の長岡市民についての資料もある。併せて分析すれば，さらに新しい発見があったかもしれない。

2　情報を持ちながら分析し残したことは，ほかにもある。(a)使用率の低い多くの地方語形。(b)被調査者の職業。(c)ザイ/ザエ，ハイ/ハエなどの音韻的変種。(d)2形（以上）併用の場合の，新/古，多/少などの区別。機会を得て，分析結果を発表したいと考えている。(1964. 10. 4)